

杉本健吉コレクションについて

木本 文平

碧南市藤井達吉現代美術館は、令和5年度に画家の故杉本健吉氏のご遺族から同氏が収集されたコレクションと自作を含む265点の作品と資料66件のご寄贈を受けました。

その寄贈絵画265点の内訳は、杉本氏自身の作品が208点で、残り57点は本人が収集されたものでした。膨大な点数のため詳細な調査報告にはもう少し時間が必要かと思えます。とくに杉本作品の風景スケッチについては、取材場所が多岐に渡っている関係から取材場所や制作年などについての調査を慎重に進める必要があります。

さて今回の紀要では、杉本健吉氏が収集・所蔵された作品（以下杉本コレクション）についての紹介をいたします。

杉本コレクションの特色は、形成の骨格となっているのが杉本氏と直接交流のあった作家の作品、もしくは彼自身の制作上において重要と思われる作品で構成されていることです。

とくに杉本氏が師事し、終生敬愛してやまない岸田劉生（1891-1929）の作品類が21点も含まれています。次に多いのが杉本氏と共に奈良の観音院で修行に励んだ須田尅太（1906-1990）の13点、そして杉本氏が制作上において関心を持った朝鮮の民画15点や東大寺塔頭観音院住職の上司海雲（1906-1975）から譲り受けた伝・文徴明（1470-1559）の卷子などが挙げられます。これらの作品について紹介する前に、まずは画家・杉本健吉についての簡単な紹介と岸田劉生（以下劉生）との師弟関係について述べておきます。

杉本健吉は明治38年名古屋市に生まれ、平成16年に満98歳で亡くなるまで画家として幅広く旺盛な活動を続けました。彼は愛知県立工業学校の図

案科を大正12年に卒業し、観光ポスターなどの凶案業を営みながら絵画制作に取り組んでいました。20歳の時に、関東大震災後京都に移り住んでいた劉生を訪ね、弟子入りを許されています。そして昭和4年の劉生没後は梅原龍三郎に師事し、戦中から戦後にかけての奈良・大和地域を描いた作品によって、洋画や日本画といったジャンルの垣根を越えた表現の画風を確立しました。戦後、吉川英治の連載小説『新・平家物語』や『私本太平記』などの挿絵を担当し、全国的にその存在が知られました。その後も世界の各地を訪れ「つくり絵は好みません。生まれる絵をあこがれます」を信条に、自由闊達な表現による臨場感あふれる作品を誕生させて多くの人々を魅了し、平成16年に満98歳で絵筆を置くまで生涯現役を全うした画家でした。

さて、杉本健吉と劉生の出会いですが、大正12年の関東大震災で被災した劉生は、当地の支援者であった鈴木鎌造と片野元彦の手配により、京都へ転居する途中で一時名古屋に滞在しました。この時、滞在先となったのは名古屋の南武平町にあった片野元彦の家でした。この片野は劉生の下で洋画を学び、草土社の公募展に応募し入選した人物で、戦後は国画会で染色家として名をなしています。なお、この片野家は葉問屋を営んでいた家系で、劉生の父・吟香と親しい関係にありました。(註1)

杉本の話によれば、大正12年9月18日の夜に鈴木鎌造に連れられて、劉生の滞在先の片野家へ行き劉生に会ったとのこと。しかし、劉生日記には「夜鈴木鎌造君来訪」と記されているのみで、当時18歳であった杉本の名前はありませんでした。正式に彼が弟子入りとなったのは二年後の大正14年20歳の時で、京都の南禅寺草川町に転居していた劉生を訪ね入門を許されました。その頃の劉生は、「江賀海鯛(エガカイタイ)先生」と自称し中国の宋元画や初期肉筆浮世絵の収集に熱中し、自身の作品も東洋画的な傾向のものが多くなっていました。

さて入門を許された杉本ですが、京都から鎌倉の長谷に移った劉生から内弟子の誘いがあったとのこと。しかし、この件については家庭の事情を話し、丁重にお断りをして名古屋から鎌倉へ夜汽車で通い、本格的な指導



① 岸田劉生《劉生・麗子像》

1928年

を受けたと言います。(註2) この劉生からの直接的な指導は、昭和4年に劉生が急逝するまでのおよそ5年間という短い期間でありました。しかし、後日の回顧において、絵についての骨格づくりを劉生から得ることが出来たと語っています。(註3) こうした師弟関係のなか、杉本のコレクションとなった劉生作品については次のものがあります。

① 《劉生・麗子像》鉛筆、紙 額装 1928年(昭和3)制作 縦21.4×横19.0cm

この素描はスケッチをする劉生とそれをのぞき込む麗子が描かれている貴重なものです。

② 《竹林七童図》紙本着色、墨書 軸装(共箱) 1926年(大正15)制作 縦124.0×横34.1cm 「劉生の会鑑定証No. 635」

劉生は日本の画家では富岡鉄斎の作調に関心を持っており、この作品も自由奔放な筆使いや豊かな彩色からその影響が窺えます。

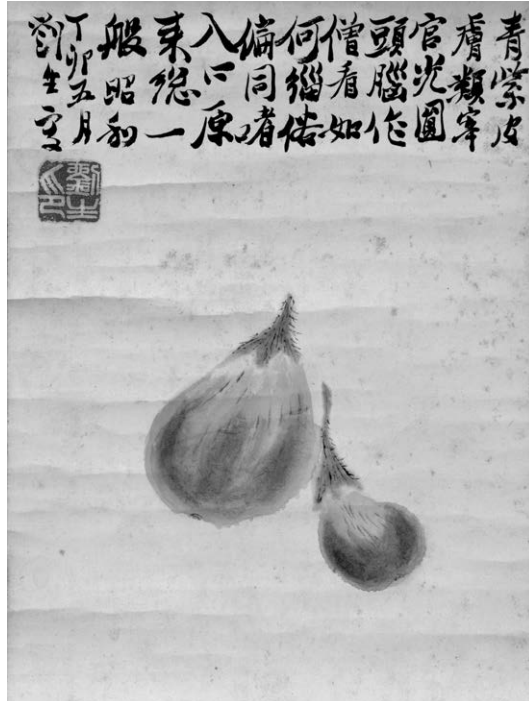
③ 《茄子》紙本着色、墨書 軸装 1927年(昭和2)5月 縦29.0×横21.5cm 「劉生の会鑑定証No. 637」

劉生の日本画は南画的な描法と院体風の写生に大別されますが、この作品はその中間的な表現となっています。

作品①から③については、杉本が戦前から所蔵していたものといえます。それは、ご遺族が整理・編集された『絵描き杉本健吉の昭和20年―1945年の手帳より―』(2020年2月10日発行)に収録されている「應召後の処置」の文中に「……岸田劉生氏の日本画(竹林七童、茄子図、麗子素描(先生の側に立てる))は岸田氏をよく識る人以外には渡さざること……と記載されています。これは、終戦の年に書かれた手帳の最後の頁に、杉本本人が来るべき応召に備え、家族への遺言と思われる記述があり、その文中からの抜粋です。他にも「絵のことは鈴木鎌造氏、大谷房吉氏に一任の事 希望《博物館中央》は個人の所蔵でなく、例えば奈良



② 岸田劉生《竹林七童圖》
1926年



③ 岸田劉生《茄子》
1927年



④ 岸田劉生《漁礁問答》
昭和初期

博物館あたりへ献納したし。絵のことは小生戦死後に処理されたし。」など自身の作品を含めた指示が記載された内容となっています。さて、作品紹介に戻ります。

④《漁礁問答》紙本着色、墨 軸装（共箱）昭和初期 縦137.0×横34.3cm
〔劉生の会鑑定書No. 633〕

この作品は、まさに富岡鉄斎を意識したもので劉生らしい軽妙な筆致が窺われます。

なお、この作品は1976年（昭和51）の愛知県美術館での「岸田劉生展」に出品。

⑤《茄子と蓮根》絹本着色、軸装（共箱）1926年（大正15）3月 縦29.0×横26.8cm
〔劉生の会鑑定書No. 638〕

この作品も1976年（昭和51）の愛知県美術館での「岸田劉生展」に出品。

題名は《蓮根茄子図》と表記されています。

⑥《三柿三色》紙本着色、墨 軸装 大正末期？（調査中）縦26.5×横23.5cm
南画的描法でよく題材とした柿をモチーフとした作品です。

⑦《籠中競甘》紙本着色 額装 大正末期？（調査中）縦27.2×横24.1cm
南画的描法で籠盛にした甘味を誇る果実などを描出しています。

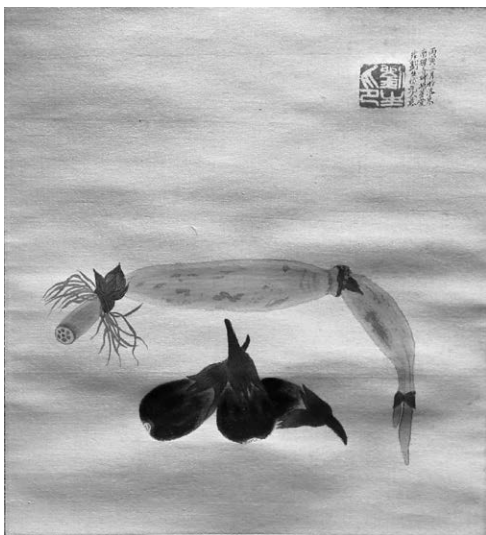
⑧《四時有甘》紙本着色、墨 軸装 1926年（大正15）縦145.8×横38.6cm
〔劉生の会鑑定証No. 636〕

春夏秋冬を代表する果実を鉄斎風の描法を用い、色彩豊かな作品となっています。

⑨《猫と小唄》紙本墨画、墨書 軸装 制作年調査中 縦34.2×横63.4cm
〔劉生の会鑑定書No. 634〕

猫を主とした都々逸風の小唄を墨書した作品で、横堀角次郎の箱書きがあります。

⑩《猫の恋》紙本着色、墨 軸装 制作年調査中 縦35.9×横7.3cm



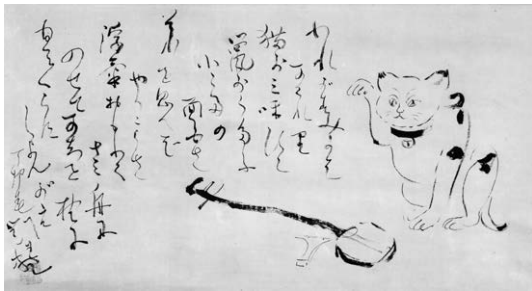
⑤ 岸田劉生《茄子と蓮根》
1926年



⑦ 岸田劉生《籠中競甘》



⑥ 岸田劉生《三柿三色》



⑨ 岸田劉生《猫と小唄》



⑧ 岸田劉生《四時甘》
1926年



⑩ 岸田劉生《猫の恋》



⑪ 岸田劉生《竹林七童図》

- ⑪ 《竹林七童図》紙本着色、墨 軸装 制作年調査中 縦 83.7 × 横 16.0 cm
- ⑫ 《秘画1》紙本墨画 軸装 制作年不明 縦 22.5 × 横 36.6 cm
- ⑬ 《秘画2》紙本墨画 捲り 制作年不明 縦 37.7 × 横 50.9 cm
- ⑭ 《画稿1 (茄子)》着色、紙 捲り 制作年調査中 縦 131.0 × 横 34.5 cm
- ⑮ 《画稿2 (婦人像)》墨、紙 捲り 制作年調査中 縦 83.8 × 横 34.5 cm
- ⑯ 《画稿3 (山水図)》墨、紙 捲り 制作年調査中 縦 132.0 × 横 34.3 cm
- ⑰ 《画稿4 (狗)》墨、紙 捲り 制作年調査中 縦 38.9 × 横 49.0 cm

この画稿は、1923年制作の院体風写生描法による《白狗図》の草稿と思われる。

- ⑱ 《画稿5 (花)》墨、紙 捲り 制作年調査中 縦 39.3 × 横 27.3 cm
 - ⑲ 《画稿6 (冬瓜と葡萄)》墨、紙 制作年調査中 縦 39.7 × 横 49.6 cm
- この画稿は、1926年制作の宋元画風の描法による《冬瓜茄子図》の構図との類似性が窺えます。
- ⑳ 《画稿7》着色、紙 捲り 制作年調査中 縦 45.8 × 横 58.9 cm
 - ㉑ 『造形藝術の二要素』(劉生自筆原稿) 墨、鉛筆、着色 紙 卷子 1926年(大正15) 10月 縦 24.1 × 横 342.0 cm

この原稿は岡山市教育四十年を記念して、同市深柘小学校で「造形藝術の二要素」について講演したものです。所々に劉生による朱字のチェックがあり、リアル感にあふれるものがあります。以上が杉本コレクションに含まれる岸田劉生関係の作品および資料です。これらの作品類のうち一部は展覧会で公開されたものもありますが、多くは未公開のものといえます。とくに劉生が描いた秘画や滑稽画そして草稿画などは一般的には目に触れる機会は無かったといえましょう。また、私自身、劉生の画論を述べた自筆原稿を見るのは初めてのことで、あらためて杉本と劉生の関係の深さを垣間見たと思います。なお、劉生の画論の原稿は、杉本が観音院の上司海雲から譲られたものです。

杉本コレクションには、注目すべき作品として劉生作品のほかに冒頭に



⑬ 岸田劉生《秘画2》



⑫ 岸田劉生《秘画1》



⑮ 岸田劉生《画稿2》



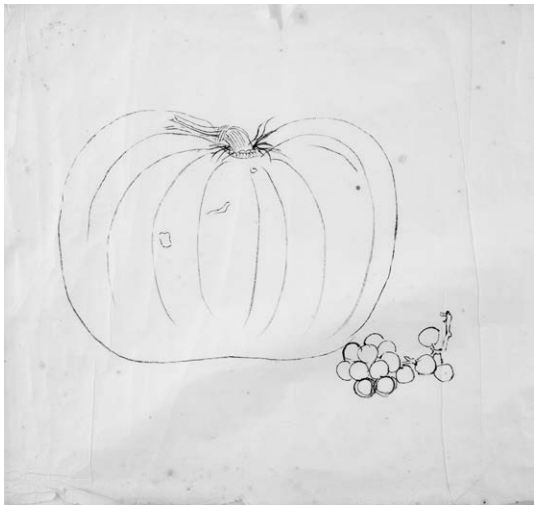
⑭ 岸田劉生《画稿1》



⑰ 岸田劉生《画稿4》



⑯ 岸田劉生《画稿3》



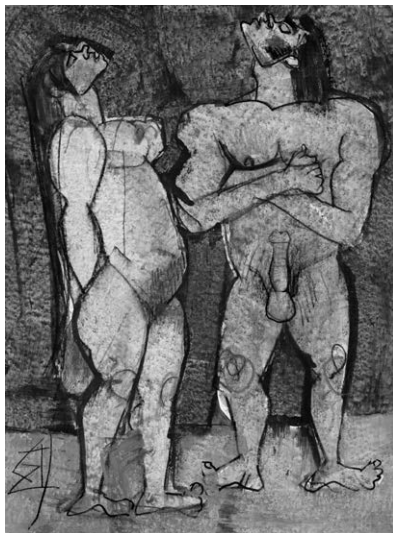
⑲ 岸田劉生《画稿6》



⑱ 岸田劉生《画稿5》



② 須田剋太《秘画 7》



② 須田剋太《秘画 1》

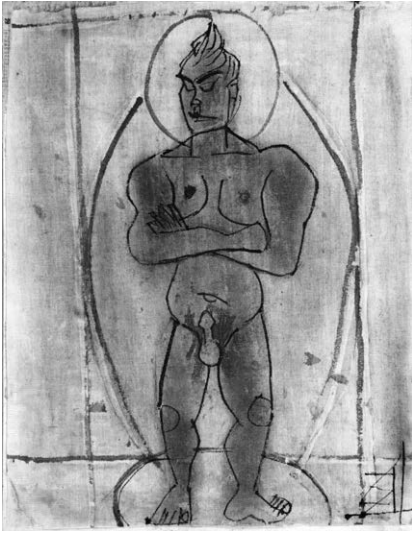
記した須田剋太の作品13点があります。杉本は、昭和17年頃に観音院の上
司海雲から須田を紹介され、以降親しい交わりが続けられました。あるエ
ピソードとして、杉本と須田が上司の好意で観音院の土蔵を改良してアト
リエとして活用していたときに、須田との「うどん食べ比べ競争」を必死
に行っていたという微笑ましい話などが残っています。また、二人は上
司が志賀直哉や会津八一、入江泰吉等と結成した文化サロン「天平の会」
に参加し、互いに切磋琢磨して画業に励み、終生深い友情が育まれていま
した。そして両者が世に知られるようになったのは、互いに杉本は吉川英
治の『新・平家物語』、須田は司馬遼太郎の『街道をゆく』の挿絵の世界
でした。この二人の友情を示すような作品として、須田は杉本に二組しか
描かなかった《秘画》9点を贈っています。作品は墨やコンテ、インク、
鉛筆、着色など多彩な素材を用いて、男女の絡み合う姿を大胆かつ強力な
筆致で生命力あふれる表現で描出しています。この作品の制作年は抽象表
現から具象表現に立ち返り、1987年頃に描いた人物表現に近いものが
あり、同年代ではと推測されます。(なお、この秘画作品については、須
田の意図が記された詳細な手紙が添えてありました。)

その他の須田作品は、《瓶のある静物》、油彩・カンヴァス(52.6×45.5cm)、《仁
王像》、グワッシュ・カンヴァス(39.5×31.0cm)、《屋根》、墨、着色・紙、捲り
(31.1×47.0cm)、《毘沙門天像》、鉛筆、墨、着色、捲り(44.1×25.4cm)。

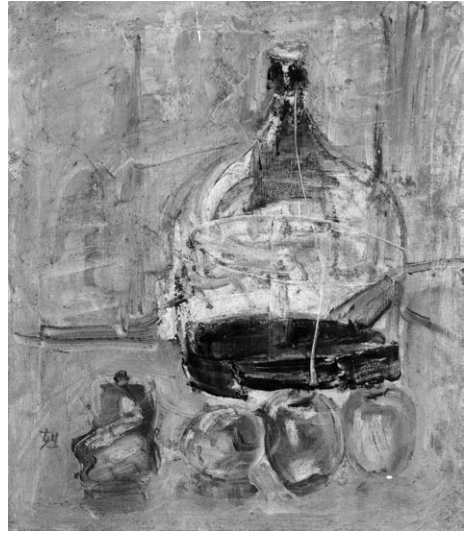
以上13点の須田作品は、いずれも作家の特質が充分に発揮されたもので、
杉本との友情の厚さを感じさせられます。このほかにも、貴重な朝鮮の民
画や日本の大津絵などがコレクションとして含まれていますが、紹介は次
の機会にいたします。

(註1) (註3) 拙著『生きることは描くこと―杉本健吉物語―』画家を目指して④より

(註2) 『余生らくがき―杉本健吉画文集』18項(求龍堂2001年)



②④ 須田剋太《仁王像》



②③ 須田剋太《瓶のある静物》



②⑥ 須田剋太《毘沙門天像》



②⑤ 須田剋太《屋根》